

メタファーとしての観音ーアジア女性神学から

小松 加代子

Abstract: Kwan Yin 観音 is introduced from Buddhism to describe “Holy Spirit” in Christian theology by some Asian Women Theologians. Doing theology is a political activity and everyday “praxis” for Asian Women. Kwan Yin is one of the symbols they have created to mediate between their own experience and Christian teachings. Kwan Yin is also believed to be rooted in the ancient Goddess worship that permeates through East Asian countries. This paper will examine the meaning and the role of the Kwan Yin metaphor in the Asian Women’s Theology and how far this symbolic intertextuality may be developed.

Keywords: メタファー、観音、アジア、女性神学、文脈

新しい神学表現の創造

かつて普遍的な学問と考えられていた神学が、多様な民族の存在、他宗教との対話などから、その普遍性に疑問が投げられ、時代や社会によってその解釈が異なるという認識から、「解放の神学」「フェミニスト神学」「ラテンアメリカの神学」「アジアの神学」などの、それぞれの文脈に応じた神学が必要と考えられるようになってきている。しかしながら、文脈化神学はどうしても、従来の西洋世界のキリスト教を正統的なものとして、そこから「逸脱した」西洋世界以外のキリスト教のあり方のみを取り上げる傾向が見られる。土着化や文脈化の視点も、西洋世界には見られない「独自」の解釈、たとえばアジア的解釈、といった点に目が向けられがちである¹。また、一方で、文脈化が状況に応じて無限に細分化され、相対化をもたらす可能性がある。相対化が進むとキリスト教神学の存在そのものが脅かされることになる。これに対して森本は、「古典」と呼ばれるテキストが、必要な変更を加えていつでも誰にでも妥当する真理を語ってきたと語る。そしてキリスト教伝統を言語と類比させ、さまざまな表現が生み出される言語運用が文法的に意味を成すかどうか制限を受けるように、神学における新しい表現は「正統」によって排除される範囲かどうかを示される、という。時代ごとに社会ごとに特定の文脈から新しい表現が生み出されるが、規範は正統に寄与されているというわけである。しかし、文法からは新しい表現は登場しない、つまり「正統は神学を形成しない。各人は自己の信仰からさまざまな表現を自由に産出する²」のである。

ここでは、神学における新しい表現が登場する際に、そこに現れるメタファーに注目し、そのメタファーがどのように選ばれ、使用されるのかに注目したい。メタファーとは、「未知のものを類似あるいはなじみのある既知の事柄のたとえで理解を促進する」ものである³。特に、キリスト教の中で用いられる観音というイメージを追いかけることによって、新しい表現がどのように創られるのかを考えてみたい。

東アジア型聖母像

外来の信仰を受容する場合、当地の諸条件に応じた「土着化」が見られるのは当然である。日本におけるキリスト教の研究は、こうした土着化に焦点を当てて扱われることが多かった。たとえば武田は、「日本の精神的伝統にとっては、異質の価値観、人間観、歴史観を持つキリスト教という宗教との出会いによって、どのような変化」が生じたのかを問うている⁴。マリア観音については、豊臣秀吉のバテレン追放令や江戸時代のキリシタン禁止令でキリスト教が弾圧されるようになった後に、弾圧から逃れて信仰を続けるために、観音像を崇拜対象としていたとされる。発見された観音像の多くが子どもを抱えていることから、イエスを抱いた聖母マリア像を模したものと考えられ、隠れキリシタンに見られる観音像の利用は、キリスト教を隠すために異なる宗教の形を取ったと見なされてきた⁵。

そうした土着化という視点が、キリスト教徒によって用いられた観音の解釈に影響を与え、日本近世のキリスト教が軽視されたと批判するのは若桑である。若桑は、「マリア観音」という言葉が近代の(大正時代の)研究者の命名であり、実際に拝んでいた人々はサンタマリアと呼んでいたことを重視する。また、子どもを抱いた像だけが崇拜の対象であったこと、数多くある観音像の中からある特定の観音像が選ばれていたことにも注目し、信じていた人たちは観音として見ていたのではなく、あくまでもマリア像としてみていたのではないかと推測する。さらにマリア観音像と思われるものが、日本国内だけで作られたものではなく、中国から導入されたものであったことを指摘している⁶。

詳細な資料の解釈から若桑は、この一般にマリア観音と呼ばれるものは、16世紀の東アジア一般に広まっていた、「東アジア型聖母像」と呼ぶべきものではないかという。それは、「マリア観音」と呼ぶのは適切ではなく、「代替でもなく、化身でもなく、習合仏でもない。日本および中国のキリスト教徒が創造した独自の「マリア」像である⁷」というのである。

そもそも観音は、中東からインド、中国、朝鮮半島、日本へと伝わる間にさまざまな要素へと変容していたが、家父長制社会における一般民衆の思いとして根強い大地母神に関わる信仰が女性型の観音信仰としてできあがっていったという。この時期、キリスト教そのものが、ヨーロッパでも宗教改革の波の中で、プロテスタント・カトリックそれぞれに教えの形を変容させていった時期でもあった。ヨーロッパカトリックの社会の中で聖母マリアへの崇敬が強まったように、東アジアでも東アジア風の姿をした聖母マリアが崇敬されていたというわけである。その両者ともに、キリスト教以前の大地母神への想いがあったのではないかと若桑は述べている。つまり、大地母神が観音に表象されていたからこそ、聖母マリア像が観音に似たのだと言い換えてもいいだろう。

東アジアの民族と土地の風土、心性、伝統に、キリスト教のアイコンが加わることによって、現在マリア観音と呼ばれるものが生み出されたのであり、それは聖母マリアとして当時の信者が自分のものとした聖像だった。観音像の姿に似た聖母マリア像こそ、当時の信者共同体がキリスト教のシンボルとして受け入れたものだといえよう。

現代における観音のメタファー

当然の事ながら、16世紀の東アジア型聖母像は、すでに歴史的な文脈を異にするものとなっている。現代の社会において、観音のメタファーを使うのはなぜか。その観音のメタファーをキリスト教のシンボルとして支持するのは、どのような人々であり、どのような共同体なのだろうか。

中国における観音信仰の変遷をたどり、観音が女性に示すシンボルとしての意味を研究したバーバラ・リード(Barbara Reed)は、観音菩薩は中国仏教のコンテキストでは女性として象徴化されるようになるが、観音が明時代から現代に至るまで、複雑な働きをしていることを指摘している。家父長制社会の中で女性にとって苦しみであると考えられていた結婚を拒んだ観音の伝説から、観音が歴史的に中国の女性にとって解放のシンボルである一方で、女性が社会の中に適応できるように子宝を授ける働きをするという女性の守護神としても存在しているという。現代社会においても、ジェンダーの規範は変化しつつあるが、家族という枷から独立して自らの精神性を追い求めるモデルとして、また他方で家族を守るというモデルともなり、女性の人生における多様な価値を象徴的に保障しているのだという⁸。

観音のイメージをキリスト教に応用しようとする人々がいる。アジア系アメリカ人であるサザード(Naomi Southard)は、アジア系アメリカ人女性がマイノリティとして、そのアイデンティティが断片化し、孤立していると感じるという。さらにアメリカでキリスト教徒であることは、アメリカの開発力と支配力を支援する教会の中で劣位に置かれている⁹。そうした立場から、関係性やつながり、コミュニティを支えるイメージとして、女神とシャーマニズムを復活させ再発見するのだという。その女神としてサザードがあげるのが観音である。観音は、抑圧された民衆、特に女性の解放者としてのイエスを示すものであるという。人間の痛みを感じ、人間と一緒に苦しむのは、イエスが受肉したからこそである。観音に見出されるものは、抑圧された人々と一緒に苦しむ神の姿である¹⁰。

またアメリカに住みながら、韓国の文化に積極的に同調しようというのがチョン・ヒョンギョン(Chung Hyun Kyung)である。韓国生まれの神学者であるヒョンギョンは、アメリカで神学を学んだ後ユニオン神学校で教えつつ、韓国での経験から西欧の神学的訓練から脱教育し、専門家ではない一般民衆の神学が必要だと信じるようになった。

卑しめられたアジアの女性たちを自分の神学の主要な文脈として選ぶことは、彼女たちの経験に対して責任を負う神学をすることを意味している。貧しいアジアの女性たちを人間扱いされない者の立場にまで落としめた文化的覇権主義の中核である、西欧男性知識人たちの生活経験から出てくる神学用語、枠組み、設問を、アジアの女性たちの神学資料として用いることはできない¹¹。

神学を語るのに西洋文化の教養が必要なのかという問題に直面した時、チョン・ヒョンギョンはヨーロッパキリスト教の伝統とは異なる社会で生きる人々の生活とそこでの経験からの解釈こそが生きる神学であると考えようになったのである。そこでヒョンギョンは、積極的にアジアの生活の中に根づいた言葉、たとえば、「観音」という語彙を導入する。

私にとって聖霊のイメージは、観音のイメージから来ている。観音は、東アジアの女性たちに人気のある信心の対象であり、慈悲と智恵の女神として崇拝されている¹²。

ヒョンギョンが観音の中に見出す特徴は、次の点である。

観音とは菩薩で、すでに悟っている存在であり、ニルヴァーナにいつでも行けるにも関わらず、それを断って、この世で苦しんでいるすべてのものへの慈悲の心で残っている。この世のすべてのものが悟りを開くのを待っている¹³。

観音は、人々からの救いを求める声を観てそれに応えられるという、さまざまな状況で苦しんでいる人々の希望となっている。観音がすべての人の救いを願い、自らの救いを保留してまでも全ての人の救いが完成するまで待ち続けるということから、「聖霊」が同様に、全ての人の救いを願う存在であるという理解につながるというわけである。

観音のメタファーを支えるもの

サザードとチョン・ヒョンギョンが「観音」を用いたのには、2つの要因を考えることができる。それは観音がもつ女性性と人間性の2面である。観音は一般民衆の信仰の中では女性のイメージでとらえられることが多い。神に女性のイメージを加えること、それが第1点である。

16世紀の東アジア型聖母像に見られるように、16世紀はヨーロッパのカトリック教会を始め、その宣教師たちが訪れた国々で聖母像の重用が見られた。しかし、サザードとチョン・ヒョンギョンの観音の類比はそれとは異なり、聖母マリアを観音から理解しようとするのではなく、キリストや聖霊、つまりは神との類比として取り上げることなのである。

おそらくこれは、キリストの女性のイメージでもある。キリストは我々の中で最初に生まれ、前を歩み、一緒に他の人たちを連れて行く¹⁴。

イエス像よりも聖母マリアを崇敬するという代替としてではなく、女性性を見出そうとするのはキリストにおいてである。アジアの女性たちにとって、伝えられたキリスト教が男性中心主義に彩られていることには違和感を禁じえない。それに代わるものとして、ヒョンギョン以外にも、キリスト教の解釈の中で、大胆に女性としての神の存在や、母親としての存在を強調しているアジアの女性神学者たちがいる。

たとえば、フィリピンにおける聖母(イナ)は、キリスト教の教えと矛盾しないものと考えられている。神の性格として示される聖母イナの特徴は、次のようなものである。

「神聖な子宮—生命と養育の源泉—としての母のイメージ」

神聖な子宮は「保護を与え、各部分すべての生命を発生させ維持することのみを求める」¹⁵

フィリピンがキリスト教化される以前は母権的土着文化が残り、植民地化される以前の文化まで、

母親や祖母は男性からも女性からも非常に尊敬されていたという¹⁶。ここには、若桑が指摘したように、全世界的に見られる太古の大地母神への崇拜の残りが各地で息づいているということができよう。

また第2点は、観音から、神のイエスへの受肉を想像することである。人々の苦しみに寄り添う神の存在こそ、観音が象徴していると考えられる。観音は菩薩であり、菩薩はもともと人間であった。ヒョンギョンは、韓国の文化的枠組みにおいて、上からのキリスト論(神が人間になる)は、一般的民衆とくに労働者たちにとって、理解することは困難であり、それに対して人間が神になる(下からのキリスト論)は理解しやすいという。

「人間が神となる」ことは、彼らにとって理解することが容易である。メシアとしてのイエス・キリストは、歴史的イエスのイメージにおいて、より理解される。ご自身よりも隣人を愛された彼は、この偉大な愛のゆえに、苦難と犠牲を乗り越えることを通してメシア、すなわち人類の救い主となられた。他方、イエスは神であったがゆえにメシアであったと唱える理論は、あまり説得力を持たない¹⁷。

人が神になる、と考えられる習慣は韓国のみならず、日本にもある。「人生において特別なことをなした人々が、死後に神々となる」と伝統的に考えられているのだが、それを神が人間の形を取ったというイエスの理解に当てはめることによって、イエスを理解することができるのだとヒョンギョンはいう。こうした文脈の中で、観音のメタファーが選び取られているのである。

韓国の女性たちは、イエスのようになることで、受肉の神秘と「我々と共におられる神」を経験する。運動を担っている多くの韓国キリスト者たちは、私たちは真のキリスト者になるために「小さなイエス」(little Jesuses)となるべきだと主張する。へ¹⁸

被造物と創造主という圧倒的な断絶としてではなく、「我々である神」として感じる事がキリスト教の信仰を呼び起こし、高めているということもできるだろう。

メタファーと共同体

「観音」をメタファーとして「聖霊」を理解しようとする試みは、「観音」信仰を体験したことのある人々の集まりである東アジアという共同体内でのみ、しかも、キリスト教の教義を知る人々の間で、インデックスを持つものとして機能するわけではない。「観音」とは何かを知らなくても、「聖霊」に関するさまざまな言説に慣れ親しんでいる人たちは、「聖霊」について自分が持っているイメージから、逆に「観音」についてイメージをある程度浮かべることができるだろう。程度の差はあれ「聖霊」についての共通の認識がある人々の中では、そこから類推することによって「観音」に接近することができる。「観音」について知識が増えていけば、その類比がもっともらしいかどうかの判断ができるようになっていく。場合によっては、「聖霊」の理解が、新しいモデルを使用することによって、「観音」文化に住んでいる人でなくとも深まる可能性もある。

したがって、「観音」をメタファーとして「聖霊」を理解しようとする試みは、「観音」信仰を体験した

ことのある人々の集まりである東アジアという共同体の中の集合体であるキリスト教徒を解釈の土台としながら、それにとどまらず、東アジア以外のキリスト教徒にも理解可能であると言うことができるはずである。

神のジェンダーの問題を論じた中で、中世に生きた女性神秘家ノーウィッチのジュリアンとアフリカの新約聖書学者の言葉を並べたソスキースも、他の文脈における言葉を別の文脈において使用することの理解可能性を示している。

ソスキースは、中世に生きた女性神秘家ノーウィッチのジュリアン (Julian of Norwich) が、キリストを「私たちの真の母 (our true Mother)」と呼んでいた例をとりあげる。それは、キリストは我々に命を与え、永遠の生をもたらしてくれたからである¹⁹。永遠の生をもたらしたのは、イエスの十字架上の死によるものであり、流された血が永遠の生命を生んだと考えたのである。

この血のメタファーの比較としてソスキースが取り上げるのが、テレサ・オクレ (Teresa Okure) というアフリカの新約聖書学者の言葉である。

血縁 (kinship) の血は、常に生き続ける先祖の血である。これが人間の血の真理ならば、キリストの血は、神の子である我々すべてを産み、命の糧を与えるものでないことがあろうか²⁰。

ソスキースはこのテレサ・オクレの言葉を、現在の西洋における親族形態よりも、中世の親族形態に近い社会に住む人の記述が新約聖書の理解を示しているかもしれない、と述べている²¹。中世のヨーロッパとアフリカという異なる文脈での血のメタファーを神の業を語るものとして取り上げるソスキースを支えるのは、メタファーの理解可能性である。ソスキースは、神秘主義者が通常使用している宗教的用語では自らの経験を表現できない場合には、それ以外の言葉を転化して用いることがあるが、それを理解可能とするのは、「自分自身の必然的に限定された経験および専門意見を広げるために共同体のより広い蓄積を使う²²」という試みだからだという。自分自身の経験を広げる信頼しうる共同体は、固定されたものとは限らないだろう。

解釈を確立する共同体

観音のメタファーを支えるのは誰なのか。チョン・ヒョンギョンは、自らの伝統に則ってキリスト教を解釈しようとする積極的な女性たちの活動として次の3つをあげている。アジア・キリスト教協議会 (CCA)、第三世界神学者エキュメニカル協会 (EATWOT)、アジアの女性たちの神学雑誌 *In God's Image* (『神のかたち』、IGI) の3つが、女性たちの神学的展開で相互のつながりや交流を奨励している。ここでは、帝国主義の被害を受けた者でありながら、キリスト教徒でありアジア人である女性たちが、抑圧的ではないキリスト教理解を進めようという共通した関心が存在する。

アジアの女性神学者たちが新しい解釈に積極的である姿勢には、宣教師が持ち込んだ聖書解釈を支持して来た共同体への批判の姿勢がゆるぎない基盤として存在している。チョン・ヒョンギョンは次のパイラン (Kwok Pui-Lan) の言葉を引用している。

アジアにおける「西欧的支配」や「文化的帝国主義」を永続化するために聖書が果たした役割を十分に認識している。・・・聖書がそれ自体の解釈のための基準を提供するとは考えない²³。

アジアの女性神学者たちは、聖書を神の言葉そのものとして恭しく受け取るのではなく、自分たちの神学資料として、聖書を受け入れる。というのも、聖書の理解が帝国主義を肯定することに使われたこと、その誤った解釈は聖書が絶対的なものだという教えと共に持ち込まれたことを知っているからである。だからこそ、「聖書本文を解放する」という言葉に見られるように、自分たちの生活の場に照らして、その他の宗教と比較しつつ、聖書を使用しようという²⁴。

チョン・ヒョンギョンに見られる、たとえば観音のメタファーは、自らの伝統における積極的な価値をとキリスト教神学に取り込もうとする創造的な活動の一部である。

アジアの女性たちの神学と新しい解釈の伝統

チョン・ヒョンギョンは、アジアの女性たちの解放の神学を「生存・解放中心的混淆主義」(survival-liberation-centered syncretism)と呼び、この多元化し分裂した世界における神のわざをより深く理解するための扉を開放することができるかもしれない、という希望を述べている²⁵。

西欧のフェミニスト神学は、聖なる言説の抑圧的な要素を認識し、それを改め社会を良い方向へと改革する運動として始まった。しかし、メアリ・デイリが1970年代に新しい言葉・新しい概念を発明することが必要だと気づいたように、女性は神学をするという伝統を持っていなかったために、既存の神学を解体し、教義を再考する必要が生じたという²⁶。西欧フェミニスト神学の影響を受けつつも、アジアの女性神学は、被抑圧経験からのラディカルな批判を内に含めつつ、自らの環境の中から教えの解釈に大胆な例を持ち込むことが可能となっている。このアジアの女性神学は、アジア以外の女性たちにとっても、聖書解釈の際のシンボルやメタファーの宝庫をもたらしているということができるだろう。

森本は、フェミニスト神学が目指すものが定着するためには、「アジア的文脈そのものに内在するフェミニスト的な伝統を掘り起こす作業が必要になるだろう。しかしこれも、そうした伝統要素がマイナーで当該文化を左右するほどの影響力をもっていない場合には、見通しは明るくない²⁷」と述べている。

観音のメタファーに見られるような女性性と人間性は、実は、アジアに太古からあった太陽女神や天地創世の女神への崇敬の現われなのかもしれない²⁸。若桑の聖母像の議論はその一端を示すものと考えられる。そしてそれを積極的に、意図的に用いようとしているのがアジアの女性の神学だということができる。こうした要素が伝統的神学を左右するほどの影響力を持つかどうかは、今後のフェミニスト神学、ひいてはキリスト教神学の発展の中に結果を見ることになるだろう。

注

- ¹ 森本あんり『アジア神学講義 グローバル化するコンテクストの神学』創文社、2004年。
- ² 森本、33頁。
- ³ 栗山直子他「共同問題解決におけるメタファーの役割」『メタファー研究の最前線』楠見孝編、ひつじ書房、2007年、438頁。なお宗教との関係では、J.M.ソスキースの神学的リアリズムにおけるメタファーの使用を利用している。ソスキースは、神を語る、あるいは神秘体験を語ることは不可能ではあっても、語っていることそのものが無意味というわけではなく、むしろ人間は不可能なことを言葉で語ろうとする試みの中で、モデルを用い、メタファーを利用する。そのメタファーが指示内容を確定することはないものの、描き出そうとする試みであると考えてるのである。J.M. Soskice, *Metaphor and Religious Language*. Oxford U.P., 1985. (J.M.ソスキース『メタファーと宗教言語』玉川大学出版部、1992年。)
- ⁴ 武田清子『背教者の系譜－日本人とキリスト教』岩波書店、1973年、90頁。
- ⁵ たとえば、宮崎賢太郎『カクレキリシタン』長崎新聞社、2002年。宮崎賢太郎『カクレキリシタンの信仰世界』東京大学出版会、1996年。宮崎は、「マリアに見立てた観音」と説明している。
- ⁶ 若桑みどり『聖母像の到来』青土社、2008年。
- ⁷ 若桑、340頁。
- ⁸ Barbara E. Reed, The Gender Symbolism of Kuan-yin Bodhisattva, J.I. Cabezon ed., *Buddhism Sexuality and Gender*, State Univ of New York Pr, pp. 159-10. また、彌永は日本においても観音を女神誕生の物語として見ることができると主張している。彌永信美『観音変容譚－仏教神話学(2)』法蔵館 2002年。
- ⁹ アジア系アメリカ人のフェミニスト神学について、黒木は、ポストコロニアルの視点から男性や西洋のヘゲモニーに挑戦し、はざまの位置から主体の再構築、再交渉を試みていると論じている。黒木雅子「ポストコロニアル」『ジェンダーで学ぶ宗教学』田中雅一・川橋範子編、世界思想社、2007年。黒木「アジア系フェミニスト神学はいかに可能か」『人間文化研究』第21号、101-113頁。
- ¹⁰ Naomi Southard, "Recovery and Rediscovered Images: Spiritual Resources for Asian American Women" U. King ed. *Feminist Theology from the 3rd World: A Reader* (1994)
- ¹¹ Chung Hyun Kyung *Struggle to be the Sun again Introducing Asian Women's Theology*, Orbis books, 1990. チョン・ヒョンギョン『再び太陽となるために アジアの女性たちの神学』日本キリスト教団出版局、2007年、23頁。
- ¹² Chung Hyun Kyung, 'Come, Holy Spirit – Break Down the Walls with Wisdom and Compassion,' U. King ed. *Feminist theology from the third world*, NY: Orbis Books, 1994, *Feminist theology from the third world*.394
- ¹³ Chung Hyun Kyung, op.cit., p.394
- ¹⁴ Ibid.
- ¹⁵ チョン・ヒョンギョン、208-209頁。
- ¹⁶ チョン・ヒョンギョン、183頁。
- ¹⁷ チョン・ヒョンギョン、137頁。
- ¹⁸ チョン・ヒョンギョン、137頁。
- ¹⁹ J.M.Soskice, *The Kindness of God –Metaphor, Gender, and Religious Language*, Oxford U.P., 2007, p.152
- ²⁰ Ibid., pp.90-91
- ²¹ Ibid., p.91
- ²² J.M.ソスキース『メタファーと宗教言語』262頁。
- ²³ チョン・ヒョンギョン、231頁。
- ²⁴ チョン・ヒョンギョン、235頁。
- ²⁵ チョン・ヒョンギョン、30頁。
- ²⁶ M. Althaus-Reid & L. Isherwood, *Controversies in Feminist Theology*, SCM Press, 2007, pp. 133-135
- ²⁷ 森本、前掲書、170頁。
- ²⁸ 野村は、太陽女神や天地創世の女神への崇敬が東アジアに根強く残っていることを論じている。野村伸一編著『東アジアの女神信仰と女性生活』慶應義塾大学出版会、2004年。